

### 3 昭和39年災害

昭和18年（1943）の災害による死者の大部分が洪水による犠牲者であったのに対して、この災害では、山崩れ、がけ崩れによる死者が犠牲者の9割以上を占めている。また、この豪雨は北陸地方にも大災害を発生させたことから「山陰北陸豪雨」と名付けられた。

当時、全国各地で、こうした山崩れ、がけ崩れに

よる被害が多発したことから、国は昭和42年（1967）急傾斜地崩壊防止工事に対する予算補助制度を創設し、本県を含む24道県で事業が行われた。さらに、昭和44年（1969）には「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」が制定され、急傾斜地崩壊対策事業が本格的に取り組まれることとなった。

#### (1) 気象状況

##### ■7月12日

低気圧が発達しながら東進したため、梅雨前線の活動が活発となり、18時30分から21時までに各地において相当の雨量が記録された。

##### ■7月14日

夜半、黄海の低気圧が東に移動し、山陰沖を東西に走っていた梅雨前線は次第に活発となって、県東部で南下を始めた。

##### ■7月15日

雷を伴う豪雨が夕方まで続き、松江市付近に集中した。夜になって前線は再び山陰沖に北上し、いったん雨はやんだ。

##### ■7月16日

未明に前線は再び南下して県東部沿岸に停滞した。松江地方を中心に再び雷を伴う激しい豪雨となり、松江市、八束郡、安来市、出雲市等県東部に被害が発生した。

##### ■7月17～19日

梅雨前線は、17日にいったん北上して日本海に出たが、18日朝から再び南下し、活発化しながら県東部に停滞した。出雲市においては、18日23時から24時までの時間雨量が70mmを超す豪雨を記録した。集中的な大雨は約10時間続き、松江市の雨量は19日朝までに300mmを超え、県東部地方に大きな被害が発生した。

#### 河川の水位状況

河川名	観測地	日	時	最高水位(m)	警戒水位(m)
斐伊川	松江	19	9	1.58	1.15
//	神立橋	19	6	3.10	2.70
飯梨川	飯梨橋	19	4	2.80	2.30
吉田川	飯島	19	4	2.30	2.00
意宇川	出雲郷橋	18	20	2.70	2.10
平田船川	新田船橋	16	11	1.84	1.00
赤川	神原	18	22	4.54	2.73
//	加茂中	18	21	5.00	3.06
阿用川	阿用	19	2	3.30	1.30
十間川	持田橋	18	18	2.60	2.00
静間川	長久	19	5	3.20	2.10
三瓶川	神田橋	19	5	3.40	2.00
八尾川	八田橋	19	8	3.30	2.00

出典：「しまねの砂防」

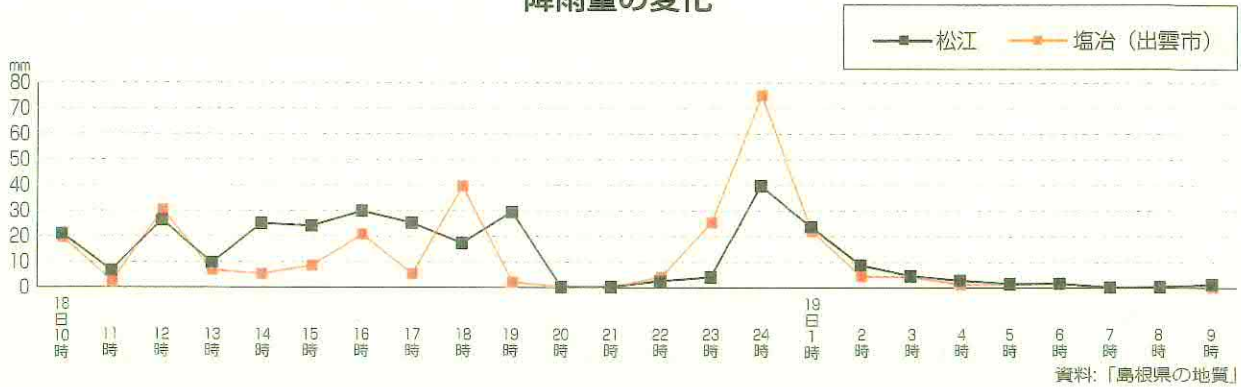
#### 降水量の最大値

観測地	連続雨量		最大日雨量	
	日	雨量(mm)	日	雨量(mm)
飯梨橋	18	275	18	275
飯島	14~19	322	18	202
出雲郷橋	11~19	613	18	309
新田船橋	11~19	503	18	312
神原	11~19	494	18	283
加茂中	11~19	516	18	265
阿用	11~19	444	18	313
持田橋	11~19	494	18	283
長久	18	196	18	196
神田橋	11~18	172	18	86
八田橋	11~18	228	18	123

出典：「しまねの砂防」



## 降雨量の変化



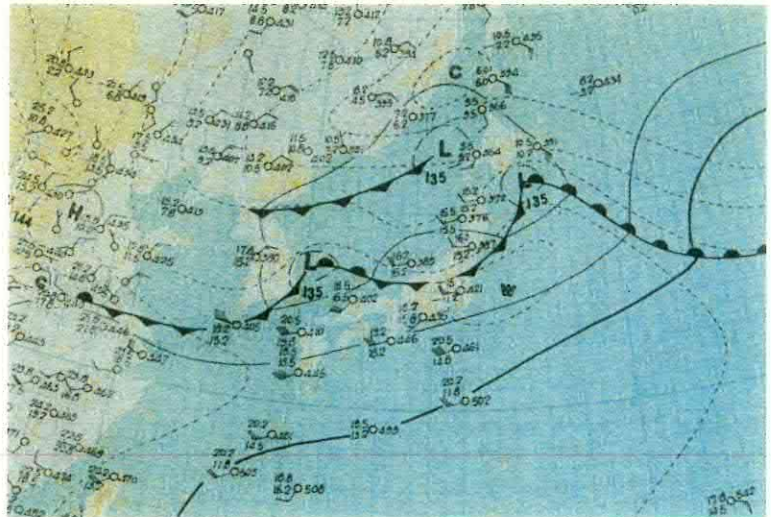
## (2) 被害状況

7月12日から13日にかけて江津市、桜江町、浜田市国府町に局地的な豪雨があった後、15日から16日にかけて梅雨前線は活発化し、県東部に豪雨をもたらした。これによって、松江市を中心とする県東部に被害が発生した。さらに18日から19日にかけて同地方に再度集中豪雨があり、雨に弱い県東部の地質も影響して、10,000ヵ所を超える山崩れやがけ崩れが起こり、地すべりも随所に発生した。

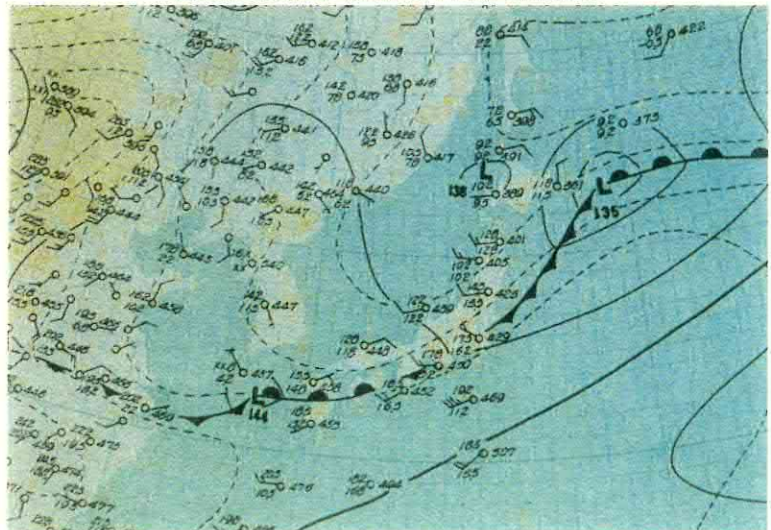
### ■人的被害

死者110名の9割以上が土砂災害による犠牲者であった。県東部の斐伊川水系赤川をはじめとして、中小河川の堤防決壊や氾濫は各地で起こったが、雨は中流部から下流部に集中したことから、雨量のわりには大河川の堤防決壊は少なかった。その一方で、大災害の2日前の7月15日から16日にかけて、県東部に約280mmの多量の先行降雨があり、18日から19日にかけて、同じ地域に約300mmの降雨量があったことから、土砂崩れが各所で発生し、多くの人がその犠牲となった。

地上天気図 (昭和39年7月18日21時)



地上天気図 (昭和39年7月19日21時)





## 一般被害状況

人 (人)	死者	110	農作物被害額(千円)	3,967,993	
	傷病者	399	農業用施設被害額(千円)	5,190,545	
	行方不明	1	山林崩壊(ha)	228,963.0	
家屋 (戸)	計	510	鉄道	不通箇所(箇所)	204
	全壊	768		不通期間(日)	15
	半壊	1,590	鉱工業	施設破壊(箇所)	20
	流失	49		施設浸水(箇所)	255
	浸水	36,588		計(箇所)	275
	計	38,995	被害額(千円)	1,045,000	
田 (ha)	流失埋没	1,183.0	船舶(隻)	流失	35
	冠水	19,280.0		破損	72
	計	20,463.0		計	107
畑 (ha)	流失埋没	136.0	出典:「しまねの砂防」		
	冠水	3,649.0			
	計	3,785.0			

## 土木関係被害概況

区分	災害箇所数(箇所)	被害額(円)
河川	2,794	5,522,394,000
道路	2,797	1,682,233,000
橋梁	241	328,102,000
砂防	190	445,362,000
海岸	2	4,727,000
計	6,024	7,982,818,000

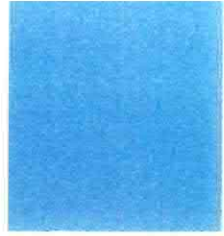
出典:「しまねの砂防」

### ■消えた集落 ～災害の悲劇～

斐伊川に臨む簸川郡斐川町の伊保地区は、昭和39年豪雨により大規模な土石災害を受けた地域である。古くから斐伊川の氾濫によって度々洪水の被害を受けてきたこの地区であるが、地元住民の話によれば、「それまで降雨時に斐伊川の決壊を心配することはあったが、土砂による被害など受けたことはなく、またそのような心配すらしたことがなかった。」とのことである。しかし、昭和39年(1964)7月、この地区を土石流が襲った。この土石流に襲われた谷には当時7戸の住宅からなる集落があった。被災した地域の近くに住む人の話によると、「災害があった7月18日は朝から、沢に時々小石まじりの水が音をたてて流れていた。夜になって突然石と石がぶつかり合いながら流れ出る大きな音に変わった後、一瞬静かになったので誰もが安心したところ、その数分後、ゴーという大きな山鳴りとともに土石流が発生した。山側に向かって建っていた4戸のうち3戸が土石流によって押しつぶされてしまい、最上部にあった家ではつぶされた家屋の下敷きになって家人のうち一人が亡くなった。」とのことである。

この7戸の集落は、この災害により現在わずか1戸が残るのみになってしまった。被災した家は他の地域に移転して住宅を再建し、また被災を免れた家もこのような被害がでる地域を恐れたり、まわりの家々が減ることによる寂しさもあり、次々と他の地域に移り住んでしまった。こうして災害によって、直接及び間接的に一つの集落が消えてしまったのである。





出雲市所原の山崩れ（出雲市）



赤川の堤防決壊で水没した加茂町（大原郡加茂町）



山崩れに襲われた家屋（大原郡加茂町）

### ■39年災害で生まれたもの ～仮設住宅とソフト対策～

立久恵峡は島根県を代表する景勝地の一つであり、国の名勝及び天然記念物に指定されている。高さ100～200mの岩盤や岩柱が立ち並ぶ渓谷は、谷間を流れる美しい溪流と相俟って、四季折々の美しさをみせている。

この立久恵峡の近くにある見々久という集落も、昭和39年の災害で激甚な被害を受けた地域の一つである。山崩れが発生し、家屋の流失や倒壊、死者も出るなどその被害は大きなものであった。災害によって家屋を失った場合、当時は賃貸住宅などがなかったため、遠くの親戚を頼って地域を離れてしまうケースが多かったが、見々久地区においては、被災者を受け入れるための仮設住宅が数戸建設され、被災者を支援した。このような災害時における仮設住宅の建設は、県内でも稀なケースであり、おそらく初めてのことだと思われる。

また、当時は雨量の観測所の数も少なく、特に山間部には雨量観測所がない所も多かった。しかし、この災害の後、山間部においても住民が自ら庭先にコップをおいて雨量を観測し、これを目安に自ら避難するなどの生活の知恵が生まれてきた。このコップによる観測は、住民自らの手による警戒意識と自主避難の芽生えであり、災害に対するソフト対策の先駆的存在である。